〔生化学　第76巻　第9号，p. 1171，2004〕

アトモスフィア

路傍の花—江上不二夫先生の言葉—

吉　田　雄　三*

生化学研究の大先達の一人である江上不二夫先生のお名前は，若い会員の方々もよくご存知のことと思う．江上先生は，私たち後進の研究者に対して極めて示唆に富んだ多くの言葉を残されたが，私の記憶には40年近く前の「生化学若い研究者の会・夏の学校」におけるご講演の一節がひときわ印象深く残っている．それは，研究を登山に例え，「誰にも見えない山を見つけたときには，できるだけ急いで登りたい．その山頂からどんな風景が見えるかを早く確かめてみたいから．でも，誰にでも見える山には，周囲を楽しみながらゆっくり登りたい．ゆっくり登れば思いもかけない素晴らしい風景に気づくこともあるだろうし，路傍に咲いている美しい花が見つかるにちがいない．」という主旨であった．その時大学院生であった私は，この簡潔な例え話の後半部分に込められた江上先生のフィロソフィーに強い感銘を受けた．

私の研究上の師であった佐藤了先生は，ご自身の研究をふり返られるときには決まって「私は，ミクロゾームの酸化還元系がミトコンドリアとは別の呼吸系であるにちがいないという間違った先入観を持ち，あまり人が注目しない，ちっぽけな研究対象だと考えてP450を取上げたのだが，結果としてこんなに大きな研究領域を切り拓くことができてとても幸運だった．」という主旨のお話をされていた．佐藤先生は江上先生の愛弟子のお一人であられたから，P450を研究テーマに選ばれたときに，無意識のうちに江上先生の研究観の影響を受けておられたのかも知れない．そのことを佐藤先生にお尋ねしたことはなかったが，佐藤先生は，酸化還元酵素研究の最先端のテーマとして多くの研究者が挑戦していたミトコンドリアの呼吸鎖電子伝達系ではなく，ミクロゾームの電子伝達系という「誰にも見えない山」に誰よりも早く登り，その山頂からの眺望をいち早く手に入れることが出来たことを「幸運だった」という言葉で表されていたように思われる．

インターネットを介して膨大な情報が飛び交い，ゲノムが読み解かれた生物種の数が増え続けている今日，私たち生命科学研究者が「誰にも見えない山」を見つけることはとても難しいことになってしまい，多くの研究者が「誰にでも見える山」あるいは「皆が注目している山」への登頂レースに挑戦せざるをえなくなっている．多数の研究グループがしのぎを削る研究レースに参加することは研究の醍醐味であり，それに勝利することは多くの研究者の目標でもあるだろう．このような研究領域には多額の研究費が注ぎ込まれ，その成果は学会のみならず社会からも注目を集めるものとなる．熾烈な研究レースとそれに伴う膨大な知識の蓄積が，科学を発展させる最大の推進力となっていることは言うまでもないことであり，多数の研究者がそのようなレースに参加し，多額の研究費がそれに投入されることは至極当然のことである．しかし，「皆が注目している山」には必ず，それを発見し注目するものにしてきた先人達の足跡があり，その山頂への一番乗りを目指す研究レースは，ともすると先人達の知見の拡大発展に留まりがちで，オリジナリティのある研究成果につながりにくいのではないだろうか．

ゲノミクス，プロテオミクス，ハイ・スループット・スクリーニングなどに象徴されるように，現代の生命科学研究はその規模と速度など多くの点で江上先生が活躍された時代のそれとは全く異なったものになっている．しかしそれでもなお，あるいはそのような状況であるからこそ，「誰にでも見える山には，周囲を楽しみながらゆっくり登りたい．ゆっくり登れば思いもかけない素晴らしい風景に気づくこともあるだろうし，路傍に咲いている美しい花が見つかるにちがいない．」という江上先生のお言葉の意味を今一度よく噛み締めて味わってみたいものである．真に独創的な研究の芽が「路傍の花」から見つかるかもしれないのだから…．

*武庫川女子大学薬学部教授